様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：２５４０３
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２２１６

研究課題名（和文）亡命ロシア人とユーラシア主義：「マイノリティ」と広域思想の関係の解明

研究課題名（英文）Russian Emigres and Eurasianism

研究代表者
斎藤　祥平（Saito, Shohei）

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：１０８０１７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：ロシアとアジアの関係を題材としたドイツの研究者よる編著の一部を担当し、現在の中国東北部や周辺地域における亡命ロシア人の動態を、ユーラシア主義や関連する思想潮流に注目しながら明らかにした。
また、隣接他分野の研究者による少数派、辺境・周縁性を扱う論集の執筆に参加することを通して、異国での境遇を克服しようとする亡命ロシア人の試みが、運動の国際的展開と密接に関わっていることを確認した。
さらに、亡命ロシア人２世へのインタビューを行い、1940年代の戦争直前・戦中の状況を反映した彼らの動向や意識の推移といった問題群を扱った研究成果を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、あくまでも個人とその周辺のグループの状況を中心としながらも、1940年代の戦争直前・戦中の状況を踏まえつつ、亡命ロシア人がどこに向かいつつあったのかという、1920年代から30年代にかけての思想や活動の延長上にあるその後の展開を射程に入れたことにある。
具体的には、1940年代の亡命ロシア人の状況を確認し、亡命ロシア人が冷戦初期において西側のソ連研究の始動にどのように関わったのかを考察した。政治的対立によって情報や人的交流が制限される中で、亡命者や戦争難民が貴重な情報源となったこと、戦前からの亡命ロシア人の活動が戦後の研究を支える基盤となっていた点などを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This project shows that the attempts of Russians in exile to overcome their circumstances in foreign countries were closely related to various international movements.
In particular the project studied the dynamics of Russians in exile in Northeastern China and neighboring regions, focusing on Eurasianism and related ideological currents.
We also conducted interviews with second-generation Russians in exile and discussed issues such as how their ideas and attitudes had changed, reflected the situation in the 1940s.

研究分野：ロシア思想史

キーワード：亡命ロシア人　冷戦　難民　オーラルヒストリー　ユーラシア主義　マイノリティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ユーラシア主義は「ヨーロッパでもアジアでもないユーラシア」の諸民族による協力を目指した思想としても捉えることができる。1917 年のロシア革命後、ヨーロッパとアジアの諸都市で亡命ロシア人によって提唱された。本研究は、従来「亡命ロシア人」として纏められてきたロシア帝国出身の様々な少数民族による同思想への関心、日本やヨーロッパ諸国の政府等との関係、各地の思想家の相互関係を明らかにするものであった。

1920 年代のユーラシア主義は、例えば、ロシア帝国崩壊後のロシア人の新たなアイデンティティであったり、亡命者によるソ連のマルクス主義への代案として示されてきたが、同思想は 1930 年代においてもソ連との政治闘争の文脈を超えて利用された。なぜ同思想が様々な時期・場所において、多様な立場から唱えられたのかについては、それぞれの事例を入念に検討することが必要であった。このため私はユーラシア主義がいかに受容されたのかに着目し、同思想が 1930 年代において、チェコスロヴァキア政府がナチス・ドイツのイデオロギーに対抗するために、また満洲国の亡命ロシア人が日本の汎アジア主義に対抗するために利用されたことを解明してきた。

チェコスロヴァキアの事例では、人種主義への反論としての利用が見られた。具体的には、ユーラシア主義者によるロシア語の論文がドイツ語に翻訳され、チェコスロヴァキア政府関係の新聞に掲載され、意図的な誤訳や内容の削除が行われた。対外的には、ドイツからチェコに流れる反チェコプロパガンダに対抗するための対独措置として、対内的には、チェコ国内の排外主義をコントロールする政治的意図があったことが明らかとなった。これはヨーロッパで外国人として暮らすロシア人の視点が利用された例であった。

満洲国の事例では、被支配下における「生き残り戦略」としての利用が見られた。具体的には、亡命ロシア人の書簡によれば、日本の汎アジア主義がアジア人のためのものである以上、日本の視点から「白人」「ヨーロッパ人」と看做され、満洲国の周縁に位置づけられるばかりか、排除されかねないことをロシア人は危惧していた。そこで、日本人が敵対する欧米人とは異なる「ユーラシア人」としての自らの独自性を示すという、いわば自己防衛の手段としてユーラシア主義の活用が試みられた。

２．研究の目的

ヨーロッパとアジアにおけるユーラシア主義受容の共通点として、「民族マイノリティ」という要素が大きく関係していることが挙げられる。本研究では、従来の研究では「亡命ロシア人」として纏められて論じられることが多かったロシア帝国の各少数民族出身者によるユーラシア主義への関心、および、ロシア革命後の亡命者にソ連兵捕虜や難民が新たに合流することになった第二次世界大戦前後における展開を明らかにすることを研究目的として設定した。

３．研究の方法

以上のように、ユーラシア主義が様々な場所で、多様な論者によって唱えられたのはなぜか、という問いを明らかにするために、国内外の多言語資料の活用（原本と翻訳の比較等）によって、各事例の受容のあり方における共通項を抽出する。

例えば、満鉄調査部による『ユーラシア主義綱領』（1931 年）の翻訳等をロシア語の原文と比較し、どのような「誤訳」・編集、政治的利用の意図があったのかを検討したところ、ユーラシア主義は、満洲国において被支配者としてのロシア人だけでなく、支配者としての日本人からも利用されたことが分かった。満洲国のアジア系住民、特に人口的多数派の漢人は、日本を頂点とするアジア主義に不満を抱いていた。こうした批判を躱し、亡命ロシア人など少数のヨーロッパ系住民を懐柔するために、「アジア人だけではなく、ヨーロッパ人のためでもある」満洲国を目指す統治理念としてユーラシア主義の採用が検討された可能性について検証を行った。

さらに、ロシア出身のテュルク系（タタール人やバシキール人）の著作のロシア語から日本語への翻訳等について、どのような意図で誰に向けて出版されたのかの検討も重要であった。具体的には、特に、バシキール人の著作において、日本との協力のみならず、テュルク系以外の亡命ロシア人との協力に基づいたソ連への対抗など、ユーラシア主義との類似点がないかを明らかにする必要があった。これはテュルク系の中では多数派であったタタール人による汎テュルク主義とは異なる特徴である。日本との協力はソ連からの自治・独立を求めたものであったが、タタール人が数の上でも在外ネットワークの上でも単独である程度運動を成立させることが可能であったのに対し、より少数派のバシキール人は日本や他のロシア人との連携を模索せざるを得なかったものと考えられる。

以上のように、ユーラシア主義が利用される理由として、民族間対立の不明瞭化、および、より広範な協力関係の模索があると考えられるため、他の事例との比較研究、隣接異分野の研究者との共同研究により、さらなる解明を目指している。

４．研究成果

2018 年度は外国語による論考の執筆と国際学会での研究報告を行った。“Dal’nijs intellektuelles Strandgut. Anarchisten, Pan-Asianisten und Eurasier am Gelben Meer” in Andreas Renner, ed., *Russische Orte in Asien*(Verlag Ferdinand Schöningh, Paderborn)は、アジア・ロシア関係を題材としたドイツの研究者よる編著の一部を担当したものである（編集の都合で予定よりも刊行が遅れた）。具体的には、この外国語による論考では、現在の中国東北部や周辺地域における亡命ロシア人の動態を、ユーラシア主義や関連する思想潮流に注目しながら論じた。

学会報告はアメリカ合衆国デンバーで開催された The Association for Asian Studies 2019 Annual Conference にて Eurasianism Exploited: Japanese Legitimation of "Manchukuo" and Russian Resistance と題した研究報告を行った。亡命ロシア人や彼らの思想が日本や東アジアの歴史との交錯した際の意義について考察したほか、多くの研究者と交流する機会を得た。

2019 年度は原稿の執筆を行い、業績２点(外国語、日本語)を刊行した。 Николай Трубецкой и его этнографическое видение национальных меньшинств в Российской империи и за ее пределами (1905–1913 гг.) . *Форум новейшей восточноевропейской истории и культуры.* No 1-2. C. 51－67 では、本研究のテーマであるユーラシア主義の思想的背景について論じた。具体的には、同主義の論客によるロシア帝国領内、およびその周辺に居住する民族的マイノリティに関する論考を分析し、そうした論考で見られた民族的マイノリティへの見方が、どのようにユーラシア主義と関

係するのかを論じた。その他、本研究と関わる事典項目として、沼野充義、望月哲男、池田嘉郎編『ロシア文化事典』（丸善出版）の「ロシアとヨーロッパ」を担当した。この論考は、ロシアとヨーロッパの関係を思想的観点から概観したもので、本研究が扱う亡命ロシア人の広域的ネットワークやその思想的広がりを再確認することができた。

2020 年度は、日本語による書籍（分担執筆）を刊行した。広島市立大学国際学部多文化共生プログラム『周縁に目を凝らす–マイノリティの言語・記憶・生の実践』（彩流社、2021 年）（分担執筆）では、隣接他分野の研究者による少数派、辺境・周縁性を扱う論集の執筆に参加することを通して、異国での境遇を克服しようとする亡命ロシア人の試みが、運動の国際的展開と密接に関わっていることを確認した。このことは亡命ロシア人が置かれていた「マイノリティ」としての立場を従来とは別の観点から再検討する契機となった。

2021 年度は「あるロシア系収容者のミュンヘン難民キャンプ–米ソ対立の始まりと『置き場のない人々』」『境界研究』第 12 巻、2022 年、55-76 頁（井上岳彦との共著）を刊行し、亡命ロシア人２世へのインタビューを題材として、本研究で得た知見を踏まえて執筆したものである。これまでは、戦間期の亡命ロシア人の思想や活動のうち、1920 年代から 30 年代にかけてを主たる研究対象としていたのに対し、本論文では、あくまでも個人とその周辺の状況を中心としながらも、1940 年代の戦争直前・戦中の状況を踏まえつつ、亡命ロシア人がどこに向かいつつあったのかという、戦後の展開を射程に入れている。亡命ロシア人の潮流の広がりに加えて、この時代における彼らの動向や意識の推移といった問題群に対して、新たな方法から迫る契機となった。

2022 年度は「溝をうめる–ロシア・ソ連研究と亡命者たち」『広島国際研究』第 28 巻、2022 年、26-31 頁。（「特集　2022 年からウクライナ・ロシア情勢を考える–国際学による多角的アプローチ」編集）を発表し、1940 年代の戦争直前・戦中の亡命ロシア人の状況、および戦後の展開という前年度に進めた研究内容を踏まえ、亡命ロシア人が冷戦初期において西側のソ連研究の始動にどのように関わったのかについて考察した。政治的対立によって情報や人的交流が制限される中で、亡命者や戦争難民が貴重な情報源となったこと、戦前からの亡命ロシア人の活動が戦後の研究を支える基盤となっていた点などを明らかにした。

2023 年度は冷戦初期における西側のソ連研究の始動と亡命ロシア人の関係というこれまでの研究内容を踏まえ、イギリスへの海外出張によって現地での資料収集を行い、その実態をさらに把握するための調査を進めた。具体的には、ロンドン大学スラヴ・東欧研究科とその機関紙における亡命ロシア人の貢献、イギリスで実施された亡命ロシア人への支援、イギリスの知識人と亡命ロシア人との交流などの関係について調査を行い、考察を深めた。

また、これら研究内容に関連した英語による書籍(共著)の原稿、日本語による事典の原稿を執筆した(ともに近刊)。前者では戦間期亡命ロシア人の思想と亡命先の政治状況との関係、特に亡命先の現地知識人による反応について扱った。後者では、戦間期の亡命ロシア人の主要な思想潮流、在ヨーロッパの複数の亡命ロシア人に関する項目について執筆した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 斎藤祥平	４．巻 28
２．論文標題 溝をうめるーロシア・ソ連研究と亡命者たち	５．発行年 2022年
３．雑誌名 広島国際研究	６．最初と最後の頁 26-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上岳彦、斎藤祥平	４．巻 12
２．論文標題 あるロシア系収容者のミュンヘン難民キャンプー米ソ対立の始まりと「置き場のない人々」ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 境界研究	６．最初と最後の頁 55-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ｓｈｏｈｅｉ Ｓａｉｔｏ	４．巻 1-2
２．論文標題 Ｎｉｋｏｌａｙ Ｔｒｕｂｅｔｓｋｏｙ ｉｎｄ ｈｉｓ ｅｔｈｎｏｇｒａｐｈｉｃａｌ ｖｉｓｉｏｎ ｏｆ ｎａｔｉｏｎａｌ ｍｉｎｏｒｉｔｉｅｓ ｉｎ ｔｈｅ Ｒｕｓｓｉａｎ ｅｍｐｉｒｅ ａｎｄ ｂｅｙｏｎｄ ｉｔｓ ｂｏｒｄｅｒｓ (1905-1913 ｇｇ.)	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Ｆｏｒｕｍ ｏｆ ｎｅｗｅｓｔ ｅａｓｔｅｒｎｅｕｒｏｐｅａｎ ｈｉｓｔｏｒｙ ａｎｄ ｃｕｌｔｕｒｅ	６．最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Shohei Saito
２．発表標題 Eurasianism Exploited: Japanese Legitimation of "Manchukuo" and Russian Resistance
３．学会等名 The Association for Asian Studies 2019 Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 広島市立大学国際学部多文化共生プログラム	4．発行年 2021年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 422
3．書名 周縁に目を凝らすーマイノリティの言語・記憶・生の実践	

1．著者名 沼野充義、望月哲男、池田嘉郎編	4．発行年 2019年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 890
3．書名 ロシア文化事典	

1．著者名 Hg. von Helena Holzberger, Andreas Renner und Soren Urbansky	4．発行年 2020年
2．出版社 Ferdinand Schoningh	5．総ページ数 -
3．書名 Russische Orte in Asien	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

ドイツ	ミュンヘン大学			